

論文概要

谷脇理史

文学博士学位請求論文

主論文[□]西鶴研究序説[□]

副論文[□]西鶴研究論攷[□]

八論文概要✓

谷脇理史

本研究は、主論文『西鶴研究序説』及び副論文『西鶴研究論攷』の二部よりなる。もと、これまでの西鶴研究を踏まえつつ、西鶴及びその諸作品について論じ、西鶴研究の諸問題に關する私見を提示し、問題提起を行なおうとした諸論を集成したものであるが、主論文では、主として各作品の意図や方法の問題を論じ、副論文では、主論文の私見をささえる基礎的な問題や種々の側面から西鶴を

押えていくための諸問題を論じている。

主論文 西鶴研究序説は、

カ一部 好色一代男の西鶴

カ二部 貞享期の西鶴

カ三部 元禄期の西鶴

の三部よりなるが、以下、順次その概要を記して行きたい。

カ一部カ一章は「好色一代男」論序説であり、近世小説史上画期的な位置を占める。

好色一代男をどのような作品と見定めることによって、その浮世草子としての内実を把握できるのかを論じたものである。

カ一部 西鶴に、その版下の筆者でもある水

田西吟の跋文が付されていることは周知だが、

本章では、広い世界の人の心のありようを面

白おかしく描きあげた、という西吟跋文の

一代男の評を手がかりとして、まず問題提起

を行なう。これまで、西吟の跋文の批評は、

全く黙殺される型で、一代男が論じられて

来ているが、当時の読者の視点を生かして、
 一代男を見直した時、一代男はどのよ
 うな作品と把握でき、その意図や方法をどの
 ようなものに見定めることができるのか。
 西鶴は一代男で主人公世之介を、
 世(「現世」)を外になして「よろづにつけて
 此事(「好色にかかぬること」)をのみ忘れず、
 生きる人物、言い換えれば、浮世の倫理や論
 理を超脱して生き続けうる人間として設定し
 ている。そして、超倫理的な立場から、好色

の世界のみを対象として、世之介は行為し、
 見聞し続けていく。それゆえに、世之介の行
 動規準は、浮世の価値規準とはかかぬりを持
 たないか、逆に浮世が価値を認めぬものこそ
 「おもしろい」として積極的にかかっている
 のか、である。したがって、世之介の心情や
 行為の描写自体に、西鶴のいう、広い世界の
 人の心の十分な把握を読みとることはできな
 い。一代男は、主人公の行為や心情に読
 者が同調することを意図的に排する非近代小

説的な設定のもとにその作品を展開させてい
るのである。以上、第一章より第四章し
しかし西鶴は、そのような設定のもとに、
浮世の倫理や論理を超脱しうる世之介に触媒
の役割を果たさせつつ、浮世の倫理や論理に
埋没せざるを得ぬ人間たちをかかわりを拵た
せる形で作品を進展させていく。そして、世
之介が浮世の価値標準から自由であるがゆえ
に、浮世の倫理や論理にとらわれていくとき
見えなかった世界が、一代男のなかに次

々と導入されてくる。それは、浮世の価値規
準からすれば、無価値なものとして切り捨て
られかねない当世の風俗であり、取るに足り
ない人の姿や心情である。が、超倫理の立場
を保持する世之介が、好色という非日常的世
界のみを対象としつつ浮世を生きる人間とか
かぬ時、浮世を生きる人間が浮世の論理や
倫理に規制されざるを得ないがゆえに葛藤を
生じ、その人の心は、その生きざまとともに
顕在化することになる。すなわち、世之介が

浮世の反価値的とする生き続けることが
 浮世を、そしてそれを生きるさまざまな人の
 心を捉えなおす媒介としての役割を果たして
 いるのである。
 かくして読者は「一代男」を読みながら、
 世之介の行為や見聞に哄笑しつつ、それまで
 の作品が捉えることのなかった人間の生や人
 の心のありようを知らされる。もちろん、そ
 の読者は、それを知ることによって、近世封
 建制下の価値秩序への確信を揺り動かされる

ことはないし、その浮世の諸相、人の心への
 認識が、認識の段階を超えることはない。
 一代男は、広い世界を生きるさまざまな人
 の心のありようを、浮世の倫理や論理を超越
 しておもしろおかしく提示するのみであり、
 読者はそれを認識して喜びとするだけである。
 それはあくまでも「転合書」であり、それに
 よって浮世に対し何らかの主張を行おうとす
 るわけではない。しかし逆に、いたずら書き
 であり慰み草であるからこそ、それは時に浮

世の論理から自由になり、浮世の価値標準に
 とうめれてゐる時には認識できない世を、
 またそこに生きる人間の風俗や心情を暗示す
 ることができたのである。
 一代男は、西吟跋文の批評を手がかり
 とすることによって、右のような構造を構つ
 た作品と分析することが出来る。西鶴は、人
 の心のさまざまなありようをいかにおもしろ
 く描くか、というすこぶる原理的なその終生
 のテーマを、と同時に浮世草子の本領となる

世界を自覚した立場を、すでに一代男の
 時点で確立してゐるのである。以上、五節
 より七節。
 第一章は、一代男の意図や方法をその
 作品構造の分析によつて全体的に問題とする
 が、第二章は、好色一代男の俳諧性とは、
 各論的に一代男の特色を考へようとする
 ものである。そこでは、広く俳諧の方法が持
 った特色を背景に、一代男を見ることにし
 て解決できる問題、たとえば、その文体意

識や作品構成のあり方の問題を論じて私見を提示する。さらに、時間の流れを重視しない作品の展開や作品巻末の祝儀のあり方を問題としながら、野間光辰氏らの『一代男』論に対して異見を述べ、俳諧師であった西鶴の『一代男』における方法上の特色を多面的に考察しようとしたものである。

第三章 好色一代男の時間意識とは、野間光辰氏らの考え方、すなわち、世之介の年令を重視し、『一代男』を現実の歴史的時間

の流れに合致させ、さらには西鶴の体験をその背後に見ようとする考え方を論破しようとしたものである。その論拠は、世之介の年令のあつかい方が巻三以後さくぶる便宜的にすぎないこと、歴史的事実とあわないものがいくつもある以上、西鶴にあわせようとする意図があつたとは考えられないこと、巻六の目錄における世之介の年令の錯誤は、単なる錯誤にすぎずそれ以上の意味を付与すべきではないこと、野間氏らの読み方には『一代男』

を私小説風に矮少化しようとする読みの姿勢があること、などである。

補論 浮世物語の論理と構成は、一代男は執筆時に西鶴が意識していたと思われる。浮世物語を論じたものであり、直接一代男にかかわるものではないが、第一章での一代男の位置づけ、その浮世草子であることの意味などを論ずる前提となるものであるために、ここに掲げた。これは、浮世の物語を志向しつつ浮世物語は何故浮世

の物語としての実質を確保することができなかったのか、という問題を、浅井了意の啓蒙家的な論理の甘さや作品構成の不備などを中心に論じたものである。

第二部第一章 諸艶大鑑への一視点 は、第一章の一代男論を背景に展開された論である。諸艶大鑑が一代男の好評に添えて書かれたものであることは云うまでもないが、その好評の内実が一代男西吟跋

文に見られる批評を中心とするものと見るこ
とによつて、日諸艷大鑑日を全体的に押えて
行く視点が生まれ、日諸艷大鑑日の西鶴のね
らいを見定めることができるのであつた、
と論じたのが本章である。同時に、本章では
先著（『遊女評判記』）批判の意図や綱吉の政治
へのアイロニーを、日諸艷大鑑日の意図と考へ
る野向光辰氏の説にも疑問を呈している。
第二章「西鶴小説の説話的基盤」は、日西
鶴諸国日はなし日、日懐硯日について論ずるため

の前提として、前者には日宇治拾遺物語日、
後者には日撰集抄日を置いて見る必要がある
のではないかと、この点を論ずる。日宇治拾
遺日、日撰集抄日ともに、近世初頭以来広く流
布し、私見では、仮名草子同様に読まれてい
たと思われる書であるが、西鶴は、それらを
目前のすぐれた敵として、その雑話物的な
二作を書いているのではないかと、そしてその
ことが、意図や方法の上で二作に影響を与え
ているのではないかと、仮説的に論じたのが

本章である。

第三章「西鶴と先行文芸」は、仮名草子作者たちには生み出しえなかった世
者たちにくらべて文盲であった西鶴が、
假名草子作者たちには生み出しえなかった世
界を生み出しえたのか、を論ずる。西鶴は「
文盲」に居なあることによつて、古典や漢籍
の権威から自由になり、その目で浮世を見る
ことができたこと、権威のない作品（仮名草
子類）とまともに競合しその逆転を意図した
こと、算を中心と考え、西鶴の先行文芸に對

する姿勢を論じたのが本章である。なお、副
論文に収めた「浮世草子成立の一要因」は、
本章における問題を別の一面から論じたもの
である。

第四章「好色五人女」論序説は、当時著
名な事件であった各巻のモデルたちをとりあ
げる時の西鶴の意図や方法の問題を解明しよ
うとしたものである。読者たちがモデルの事
件を演劇・歌謡・歌麈などを通して知って
いることを前提として書く西鶴は、事件の枠

の告白が、貞享期の風俗を生きる女性に变身す
 る型で行なわれてゐることを各章ごとに論証
 し、一代女山が、一人の女のサングの枠を
 借りつつ当世の風俗や人の心のありようを具
 体化する意図を持ち、サング物仮名草子の伝
 統を断ちぎった所で成立していること、その

や世間の評価を一心とり入れつつ、随所に創
 作を加えてその世界を作りあげようとしてい
 るのではないが、そしてその自在な創作に腕
 の見せ所を示し、文字通り好色な存在として
 主人公を描き上げることによって当世の人間
 たちのありようを誇張しつつ捉えようとして
 いるのではないかと論じ、封建女性の悲劇
 か否かという視点からだけではとらえきれな
 いと思われ、五人女山の実質を考えてみよ
 うとしたものである。

ような西鶴の意図をより重視して『一代女』
 を読むべきこと、さらには、このような作品
 構造を生みだした西鶴の時間意識・空間意識
 などを中心とした発想の問題、などについて
 論じている。
 第六章「貞享三年の西鶴」は、西鶴がもつ
 とも多くの作品を書き進めていたと思われ
 貞享三年に焦点をしぼり、その時点における
 種々の問題を論ずる。『一代女』を書き終え
 た西鶴は、なぜその素材を転換するのか、そ

の転換の位相はどのように押えるべきか、西
 鶴は、なぜこの時期にこれ程に大量の作品を
 書くことができたのか、筆々の問題を背景に
 『一代女』『男色大鑑』『本朝二十不孝』
 懐硯『武道伝来記』『日本永代蔵』の初稿
 などに触れつつ、西鶴の転換と模索の様相を
 具体的に問題にし、大量に書き続けながら町
 人物の世界をさぐり当てて行く西鶴の一時期
 を論じたのが本章である。
 以上の第二章は、各章ごとに論点は異なる

ものの本格的に浮世草子の執筆を開始した
西鶴の意図や方法を各作品ごとに明らかにし
それらをどのように読むことによってより豊
かな作品と見ることができ、を論じたも
のである。

オ三部オ一章 日本永代蔵 成立への一試
論 オ二章 日本永代蔵 初稿の問題
オ三章 日本永代蔵 初稿の成立時期、オ
四章 日本永代蔵 における文学成立の一側

面は、一連の論である。

日本永代蔵に初稿があったのではないかと
いう点については、すでに暉峻博士の論があ
るが、オ一章では、巻四以前と巻五、六との
間に長さの一致が各六ヶ所あること、類似の
ストーリー・構成・趣向・落ち等が各一ヶ所
ずつあること、長崎、敦賀、堺をえれぞれで
とりあげ類似の記述が見られること、巻五、
六に 長者教の型をうけつぐ長者訓の型が
数多く見られ、形象性や作品構成の上で未成

熟な面が見られること、算々を根拠として、
 永代蔵^コの巻五、六（六の五をのむく）は、
 その初稿が分量不足などのために急拠とり入
 れられたものと推定する。かくして、オニ章
 では、その「新長者教」的な教訓臭の濃い初
 稿の実態を見定め、オニ章では、その初稿の
 執筆が貞享三年下半期である可能性が高いこ
 と、その時点でこのような作品を書く必然性
 があることを論ずる。オニ章では、巻四以前
 の諸章と初稿とを比較しつつ、あらゆる教訓

の姿勢を脱して、種々の面から文芸性を確保
 して行く様相を具体的に問題にし、西鶴町人
 物の成立過程を論証している。
 オニ章^コ日本永代蔵の巻頭の二節をめぐ
 っては、オニ章の補論としての意味をも持っ
 たものであるが、巻頭の二節をどう読むべきか
 を中心としながら、余りに常識的な教訓の内
 容を西鶴がどのように説くことによつて面白
 いものとしてしているかを論じ、そ
 れが「五文真宝にかまえて」もつともらしく

書かれていますのではないかと結論する。
以上の五章は、従来教訓書としての面が重
視され、その主張のみがとりあげられる場合
の多い。永代蔵を、文学として問題にする
ためにはどうすべきかという視点から書いた
諸論である。
第六章 甚忍記とは何か。は、永代蔵
三都版の巻末に予告のある幻の書。甚忍記
をどのようなものであったと考へるべきか
を論じつつ、貞享五年から元禄二年にかけて

の西鶴の一面を考察しようとしたものである。
甚忍記は、これまで西鶴織留の一部
に収録されているというのが定説であつたが
貞享五年の執筆状況やその書名から見て、甚
忍記即ち織留とは考へがたいこと、本
朝町人鑑の世の人心の二系統の草稿のみ
が織留に収録されたとは考へられず、四系
統の草稿の存在が考へられること、甚忍記
がどのような内容のものであり入れて出
版できる書名であること、等より、甚忍記

は、ほぼ一年余出版を予定され書きつかれ
ながら、武家義理物語 新可笑記
本朝枅陰比事 うちの中に解体・再生され、そ
れらで用いられた残りの一部分のみが
織留 巻一、二の一部として出版されたの
ではないか、と論じたものである。
第七章 武家義理物語 への視点とは、同
書が無理に「義理物語」に仕立て上げられて
いる徴標を示すこと、その書名にひかれて義
理をテーマとした作品として論ずることに

問題があること、武家義理 全体的に押
えることのできる視点を模索すべきこと、と
論じたものである。なお、前章、及び副論又
所収の「義理の問題」は、本章に関連する問
題と別の視点からとりあげているものである。
第八章 万の文反古 における書簡体の意
味は、副論又所収の 万の文反古 の二系
列で指摘するA・B両系列の草稿の中、A
系列にのみ半丁以上にわたる書簡文体の乱れ
があることを出発点とし、A・B両系列間で

の書簡文体採用の意味が異なることを論じ、
 B系列において始めて書簡体の意味が生かざ
 れ、後の「胸算用」などへの方法的な影響が
 生まれることを論証している。
 第八章 西鶴置土産論の前提は、「置
 土産」を問題にする際の基礎的な諸点につい
 て論じたものである。まず、それが草稿を忠
 実にとり入れている点を、金井寅之助・島田
 勇雄両氏の説に反論しつつ論じ、次に、その
 目録と内容との関連に注目して、巻三の一

巻四の一以外の目録副題が編者^の手で後補され
 た可能性のあること、「置土産」はもと「巻
 を意図して書かれたものであり、一部は西
 鶴依つれ^にとり入れられはしたものの
 それを合せても「置土産」は未完のものであ
 ったこと、算々、作品論の前提となる諸問題
 を解明しようとして試みたのが本章である。
 以上、オミ部は、主として元禄期に書かれ
 た作品を中心に、その成稿過程を踏まえつつ
 西鶴作品への新たな視点を求めようとして書

いた諸論である。

副論文 西鶴研究論 攷にもまた、西鶴への

現在の私見を要約した序章「西鶴の世界」

及び、現在の西鶴研究への私見を提示した終

章「西鶴研究の現状と課題」を除けば、次の

三部より構成されている。

第一部 場と状況

第二部 方法と文体

第三部 成立論の諸問題

である。以下、簡単にそれについて触れ
ておきたい。

第一部は、西鶴作品の置かれた場や状況と
かがわらせつつ、西鶴全体について論じた三

章を収める。第一章「出版ジャーナリズムと

西鶴」は、戦後問題提起され、現在ではやや

過大視されすぎているかに見えらる出版

ジャーナリズムの西鶴への影響という問題を

再考してみたものである。西鶴とかがわりを

もった大阪の書肆が、まだ出版を始めたばかりのかけ出しの存在であること、西鶴自身にすこぶるジャーナリスティックなセンスがあること、西鶴の作品ならどんなものでも喜んで出版する書肆が次々と登場していること、等から、西鶴への書肆の圧力は少なくない。むしろ西鶴が書肆をリードしていたと見るべきではないか、というのが本章の結論である。

第二章「抒情の伝統と西鶴」は、西鶴と先行文芸とのかかわりの問題も基調とし、雅の

世界には見られぬ新たな抒情が西鶴作品に生まれていることを論じたものである。第三章「宇治拾遺物語」と西鶴とは、宇治拾遺物語が当時の読者には仮名草子同然のものとして受容されていたことを論証し、西鶴も同様にそれを仮名草子同様に横目でにらみつつ、諸国をなした。その他を書いていた可能性もあることを論じる。主論文所収の「西鶴小説の説話的基盤」の補論の意味をも持っているのが本章である。

芥二部は、何々の作品、またはその一部を
 とりあげ、その方法、文体などについて論じ
 た八章と補論一とからなる。
 芥一章「西鶴の語り口をめぐって」は、日
 本朝二十不孝山巻一の一例にあげながら、
 その語り口の特色を論じ、随所で語を相対化
 して行く様相の中に見られる西鶴の発想や方
 法を問題にし、同時に日二十不孝山巻一の一
 をどう読むべきかについて、従来の所説を批
 判しつつ再考するのが本章である。芥二章「

「好色一代男」の方法と意義とは、主論まで
 の「一代男」への私見を要約し、そのような
 方法が持つ近世小説史上の意味について論じ
 たものである。
 芥三章「日本永代蔵」の文体とは、各章冒
 頭部の文体がすこぶる変化に富んでいること
 を例示し、その文体の特色を指摘すると同時
 に、そのような文体を採用したことの意義を
 論じる。芥四章「日本永代蔵」の一章は
 同書巻二の「世界の借家大将」をとりあげ

「永代蔵」におけるモデルと創作の問題を具
体的に論じ、あわせて「永代蔵」の創作意
図や方法の特色を論じようとしたものである。
第五章「西鶴の描いた町人像」は、「永代蔵」
の数章をとりあげつつ、そこで描かれる町
人像のありようを論じている。
第六章「義理の問題」は、「武家義理物語」
を中心としながら、元禄期の義理のあり方
について論じ、西鶴や近松の作品での義理の
描き方をどう問題にすべきかについて問題

提起を行おうとしたものである。第七章「日
本永代蔵」と「世間胸算用」は、「永代蔵」
から「胸算用」への展開過程を中心に、「文
反古」を介在させつつ、意図や方法の変化に
ついて論じている。
第八章「書簡体小説の文学性」は、「文反
古」を例に、どのようにしてすぐれた書簡体
文学が生み出されたかを論じる。また、補論
「仮名草子作者の構想力と表現力」は、「浮
世物語」を対象として、啓蒙家了意の構想力

と表現力の欠陥を論じたものであるが、西鶴
との相異を明らかにすることを収めたいと
したのであるがゆえに、補論として加えた。
オ三部は、主論文での視点を確立するため
の一つの基礎となっている、各作品の成立過
程、成立時期等を問題とした六章からなっ
ている。
オ一章「成立時期の問題」は、現在、各作
品の成立時期の問題をとりあげることの意味
について論じたものであり、オ三部の序の位

置を占める論である。オ二章「好色一代男」
の成立過程は、一代男の草稿の存在を
推定し、その改編によって現在の「一代男」
が成立していることを論証し、そのように考
えることで解決できる。「一代男」のワック
の問題点について論ずる。
オ三章「浮世草子成立の一要因」は、オ三
部の成立論の中ではやや異質であるが、「一
代女」までの西鶴の初期作品が、競合しつ
つある仮名草子類の趣向や設定や内容を逆転

逆用することとを一つの要因として成立しているのではないかと論じたものである。

第四章「西鶴小説」における成稿過程の一面

レは、^口永代蔵^口巻五、六が巻一、二以前に書かれていることを具体的に論証し、あゆませ、西鶴がどのような書き方をしていたのかを推定し、そこから生まれる諸問題について論及したものである。

第五章「西鶴織留」をめぐる二、三の問題

レは、団水序文のあいまいな表現に注目しつ

つその序の諸問題に論及し、さらに「織留」の内容の分析によって、それが四系統の草稿を収録して出来上っているのではないかと論証する。主論文の「^口甚忍記^口とは何か」の補論の役割をも持つのが本章である。

第六章「万の文反古」の二系列^レは、^口反古^口にA、B両系列の草稿が存したことを版下・内容などの究明によって論証し、A系列の草稿の成立が貞享三年下半期、B系列の草稿の成立が元禄二、四年頃と推定を下した

ものである。

以上、主論文^中西鶴研究序説^中、副論文^中

西鶴研究論攷^中の概要を記したが、西鶴にか

かわって早くも二十年、その間にあげた成

果のほとんどすべてをまとめたのが、本研究

である。思えば乏しい成果に恥じ入らざるを

得ないが、今後の西鶴研究にいささかなりと

も資する所あれば幸である。